



説教要旨「世の中そんなに甘くない？」

使徒言行録9章19b～31節

キリスト者たちを迫害していたサウロは、光に打たれ、イエス様の声を聞いたことで回心し、洗礼をうけて、イエスを救い主だと信じる者となったサウロは、イエス様のことを「この人こそ神の子である」と宣べ伝え始めました。

これまでと180度転換した、サウロの変わり身っぷりに、動揺したのは、それまでサウロと一緒にキリスト者を迫害していたユダヤ人たちです。どうやらサウロが本気で寝返ったらしいと判断した彼らは、裏切り者であるサウロを殺そうと企みますが、そのことをしたサウロは暗闇に乗じてダマスコの町からエルサレムへ逃げ出したのです。けれどもそのエルサレムでも、サウロは命を狙われるようになり、地中海を船で北上したタルソスという町に逃げたのです。

また、ガラテヤの信徒への手紙によれば、サウロはこの時期に、アラビアに行っていたようです。(ガラテヤ 1:17)ところが、使徒言行録にはそのことが記録されていません。それは、わざわざ書くほどのことがなかった。つまりはそのアラビア伝道は、失敗したのだらうと考えられています。

ユダヤ教徒のエリートとして、多くの資質を持ち、才能に溢れ、賜物に恵まれたサウロは、イエス・キリストに出会い、使徒として器として選び出されました。そして生き方を180度変えて、イエス様の福音を宣べ伝える者になりました。けれども、最初からすべてがうまくいったわけではありません。初めての宣教旅行であるアラビア伝道ではこれといった成果も上げらず、ユダヤ人からは裏切り者として命を狙われ、ダマスコや、エルサレムからも逃げ出さなくてはなりませんでした。まったく思い通りにならないことだらけだったので。

サウロは、自分の力と賜物に頼っていく自信を徹底的に打ち砕かれていったことでしょう。そしてそのことこそ、この時のサウロに必要なことでした。そこで深い挫折を覚え、自分に対する自信を打ち砕かれ、失敗したからこそ、サウロは後の大伝道者パウロへと成長していくことになるのです。